

第 6 章 引退に伴うアイデンティティ 再体制化のプロセス

第1節 目的と方法

1 目的

本研究では、まず、元アスリートが競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関連してどのようなプロセスを歩んだのかを明らかにし、次に、競技引退に伴って体験した社会化予期と時間的展望がアイデンティティ再体制化をどのように特徴づけるのかを明らかにする。そして、そこでの体験が、その後の人生においてどのような影響を及ぼすのかについて、事例を通じて検討する。

2 方法

1) 調査対象

オリンピック代表としての競技経歴を持つ元アスリート（2名）を対象とした。両者は、調査時点で競技引退後20年以上が経過しており、中年期にあった。

2) 調査内容

インタビュー内容は、時間的経過に従って彼らが体験した主要なエピソードを取り上げるように配慮し、半構造化面接(約50分×7回)を実施した。そこでは、競技引退に関連したエピソードを中心に、いつ、どういった変化を体験したのか、また、そのことについてどのように受け止めているのかなど、彼らがこれまでに歩んできた「自分史」についての会話を本人に承諾を求め、カセットテープに収録した。また、インタビュー初回時には、ライフライン(図6-1、図6-3)の作成を求めた(資料10: 本文 p.289)。

3 事例提示の仕方

本研究は、2事例について報告する。それぞれの事例提示では、事例の概略並びに調査時点で記入されたライフライン（図6-1、図6-3）を掲載し、競技に傾倒していた【競技期】、引退のきっかけとなる出来事から実際に競技引退を迎えるまでの【引退期】、引退後の社会生活を含む【再適応期】という時間的経過に配慮した。次に、各事例における討議をし、最後に両者について総合的に考察している。また、事例提示についてはそれぞれの対象者に承諾を得た後、論文掲載に至っている。

ちなみに、ライフラインとは、自分のこれまで生きてきた道筋を、自分が感じた幸福感の高低によって一本の線をつないだものである。河村（2000）は、構成的エンカウンターといった心理的集団技法の中で、このライフラインを活用し、「自分探し」や「自分自身を見つめ直す」といった個人の心理的作業に利用している。その作業の中では、何があったのかという「過去の事実」よりも、現在の自分はそれをどのように捉えているのかという「現在としての過去」を重視している。従って、ライフラインは、「現在の自分」に対する理解を深めていこうとするものといえよう。本調査では、この他に面接協力者にこれまでの歩みを想起させることを助長する目的をもって使用している。

第2節 中年期に現役復帰を果たした元オリンピック選手

引退を契機としてアスリートは、それまで傾倒してきた競技生活に対して何らかの転換を迫られることになる。競技生活から引退後の社会生活へスムーズに移行していくのは、一見、極めて適応的であるかのように見える反面、この時期に直面すべきである発達課題を先送りにしてしまっていることもあるかもしれない。新たな生活を送り始め、その後、中年期に差し掛かったときに、かつてアスリートであったことを振り返ったり、引退に伴う「新たな自分づくり」において積み残してしまった課題を再び問い直すこともある。

そのような危機に立たされたある元オリンピック選手は、二十年以上もの空白にも関わらず、「競技復帰」という道を選んだ。彼は、「アスリートである自分」つまり「自分の原点」に戻ることによって、再び人生の難局にチャレンジしていく自信を獲得していく。そこには、引退期に伴う「新たな自分づくり」において先送りにしてしまった課題に再び直面した彼の取り組みをみることができる。

1 事例提示

事例の概略：調査対象者L（以下、「L」と称する）は、オリンピック金メダリストである。メダル獲得直後に競技引退を迎え、大手企業に就職し、そこで20年間の勤続を果たした。その後、知人の勧めから退社し、事業を起こし、独立を果たす。しかしながら、これに失敗し、多大な責務を負う結果を招いた。そして、その失墜の思いの中、40代半ばにして、再び現役アスリートに復帰した。調査時点においては、社会的信頼の回復を目指して様々な職務をこなしていた（図6-1）。

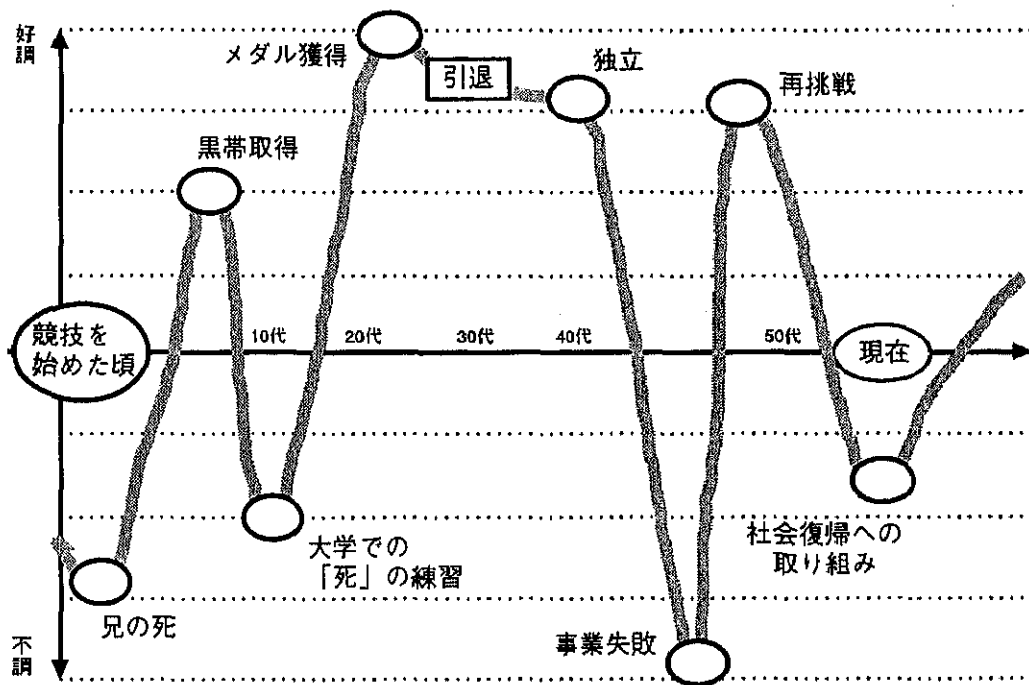


図 6-1：事例 L のライフライン

競技期：自営業の父親と母親の間に3人兄弟の末子として生まれたLは、生来、負けず嫌いの性分が強かったという。ものごころついた頃から病床にあった父親が無類の「格闘好き」であったことが、Lの競技を始めるきっかけと思われる。父親をこよなく慕っていたLは、知らず知らずのうちに「日本の国技である柔道」を、いつか自分もやりたいと思うようになっていたという。

幼少期は、しっかり者の兄（長男）が、当時病床にある父親に代わって家計に大きな役割を果たしていた。「何かにつけて頼りにしていた...自分にとっては大きな存在だった」と当時を振り返る。しかし、中学に入学する直前に、この兄が突然死去する。Lは「よし、兄貴の分まで俺が頑張る！」と幼心に考えたという。そして、「格闘好き」の父の影響と兄がやっていたということもあって、中学進学と同時に柔道部に入部した。「小柄なためか、なかなか相手を投げられない...誰よりの練習しなくちゃ...」と、当時は明けても暮れても柔道の事ばかり考えていたという。その努力の甲斐があって、Lは同級生の誰よりも早く黒帯を取得する。「ものすごく嬉しかった...亡くなった兄も持っていましたからね...なんか兄に近づけたような感じがしてね...父親も喜んでくれたし...」と、これが当時何よりも印象深い出来事であるとした。

高校入学と同時に競技を転向した。それは、柔道で世に名を馳せるには、Lの小柄な体格では困難が大き過ぎすぎると自身で判断してのことであった。また、この頃のLの家庭の経済状況は極めて芳しくなく、父親の闘病生活を母親の収入だけでは支えていけないため、Lは毎朝、家業の手伝いをしながら家計に一役かっていた。当時は「生きていくためには仕方がなかった...反骨精神っていうのかな...貧しさ故に誰にも負けたくはないという気持ちが強かった...」としていた。ちなみに、この家

計の一助と思って始めた手伝いは、競技力向上に功を奏する結果を生んでいた。「小柄でありながら...大きく重い石臼をひく...この微妙な力の入れ具合が大きな相手を引きずり回す力を養ってくれた...」と、毎朝励んだ手伝いが競技に生かされていたと振り返っていた。

Lが高校1年生の時、彼の人生にとって大きな意味のある衝撃的な出来事を迎えた。それは、同じ故郷の出身者が、中学入学と同時に転向し、取り組んでいた種目でオリンピック金メダルを獲得したことを新聞で知らされたことであった。「よし！俺もやってやろう」とこの頃からオリンピック出場を臆気ながら目標とし、競技に取り組み始めたという。その後、どんな苦しい練習に対しても「オリンピックで金メダルを」という目標が何よりの支えとなっていた。

その後、大学進学においても、「もちろん強くなりたかったから...」と競技環境を優先し、進路先を選んだ。そこは、当時師事するコーチの出身校でもあり、「知らず知らずのうちにそこに行くんだと考えるようになっていた...」と進路先の選定についてはあまり悩むことはなかった。家計が苦しい中で当時の学費は、兄（次男）の好意に甘える形となった。Lはそんな兄に対して「申し訳ないと思っていたが...競技をやりたい。オリンピックで金メダルをとという気持ちは何よりも強かった」という。大学進学後の下級生時代は、とにかく「毎日、殺されるかと思うくらいの辛い練習...」を繰り返した。この頃からLは試合に出る毎に勝利を納め、その頭角を現し始める。そんな中で、1度目のオリンピック選考会を迎えた。「目標としていたオリンピックが目前にある...」と考えると、胸躍る気分で試合会場に足を運んだ。しかし、思いも寄らないトラブルが起こる。オリンピック代表選考を兼ねた大切な大会を怪我のために途中辞退することになってしまった。自他共に、その実力たるや充分オリ

ンピック代表級に匹敵していたと信じて疑わなかっただけに、「怪我さえなければきっと（オリンピックに）行ってたに違いない」「残念で...悔しくて...」仕方がなかった。直後は、気持ちが落ち込み、なかなか練習にも打ち込むことができずにいた。ある日、そんなしの不甲斐ない姿を見て「オリンピックに行きたいなら...とにかく、そんな暇はないぞ！」と厳しいアドバイスを与えた先輩がいた。後に、この人物は、しにとって大きな存在となっていく。直ぐに気持ちを切り替え、次の世界選手権に照準を合わせることでオリンピック出場へ向けての取り組みを再度開始していった。「動物園のライオンとにらめっこをしたり...ラジオのボリュームを最大にしてその中で集中力を高めようと練習したり...勝つためには何でもやった」と、その甲斐あって、4年後にはオリンピック出場を果たし、悲願の金メダルを獲得した。この時しは、既に大学を卒業し、1年半が経過していた。

引退期：オリンピックへの出場権を得た頃から、しは「金メダルを取ったら引退しよう」と心に決めていた。「有終の美を飾るっていうわけじゃないけれど...辞めると決めたら益々燃えてきた...」と、金メダル獲得を目標として、尚一層、練習に傾倒していったという。そして、金メダルを獲得した直後、しは大手企業に就職を果たした。

しの専門とする競技種目は、「30歳前後に選手としての最盛期を迎える」という特色が広く知られていた。競技関係者も「次回のオリンピック大会でも充分メダルを狙える」としの競技継続を疑わなかった。しかし、その意に反して、しは第一線で競技を続けることばかりでなく、その競技とのあらゆる関わり合いまでも絶つという決断を下した。マスコミもこぞって「早すぎる引退」と書き立てた。

しは、金メダルを獲得するまで、「将来のことをあれこれと考えたこ

とはなかった...」という。「金メダルという目標に向けて生活の全てを捧げてきた」ということからもうかがわれるように、金メダルの目標を達成する前に、自分の引退後の社会生活、自分の職業、将来何がしたいかなどについて思いを巡らせることは全くといって良いほどなかった。そして、目標とする金メダル獲得が達成された時に、「競技が嫌になったのではない...金メダリストとして恥じることのないような生活を送らねば」「俺は(金メダルという)看板を背負ってるんだから...」という気持ち湧いてきたという。これには大学の同窓の中で最も尊敬する先輩の「競技で金メダルを取ったのだから、仕事でも金メダルを...」「一度、金メダルを取ったのだから、2度も3度もやるもんじゃない...」というアドバイスが大きく関与していた。以前、オリンピック選考を怪我で辞退した後、不甲斐ないLに厳しいアドバイスで奮起を促せたあの人物であった。ちなみに、この先輩もまた、オリンピックでの金メダル獲得という偉業を成し遂げていた。彼はメダル獲得直後、潔く競技引退を迎え、社会人としての道を歩みだし、ある企業の理事職にまで登り詰めた経歴を有していた。Lは羨望の眼差しでこの先輩に憧れを抱き、いつしか「先輩のような人生を歩めたら...」と、この先輩と自分との影を重ね併せるようになっていた。「その尊敬する先輩がいたので...」という理由から、引退直後に、Lは難なく就職を果たす。その就職先では、「金メダリストという知名度の効果に肖って...」入社直後に営業部に配属されることになった。そこでもLは無類の才能を発揮する。「金メダリストだから...周囲に負けるわけにはいかない...」との強い気持ちから、昼夜の別なく仕事に打ち込んだという。「ただただ、仕事を頑張ればいいと思った。人生の見通しなんて何一つなかった」「あの時が一番良かったんじゃないかな」と懐かしそうに当時を振り返っていた。

再適応期：会社の取引先の社長の次女と26歳で結婚し、二人の娘をもうけた。入社2年目のことである。仕事は順調を極め、社内でのステイタスも時が経過すると共に向上していった。「先輩と同じように上役にも就けそうな勢いがあった」と、当時は全てがうまくいっているように感じられ、「今から思うと...有頂天になっていた」という。

勤続10年目を過ぎた頃、突然、あの尊敬してやまない先輩が死去した。Lにとって彼の存在は大きな意味をもっていた。彼の死去により「俺は一体、この先どうすればいいんだ...」と自己の存在意義にまで疑問を持ち始めるようになった。そして、勤続20年目を迎えた秋に、知人の紹介から会社を設立し、独自に事業を興した。それまでは、様々なリスクの伴うことが気になり、会社での安定を志向していた。しかし、「こんな時、あの先輩だったら...どうしたかな?」と考えた末、一大決断に至った。「成功したいという気持ちが先走り...物事の本質を見極めてはいなかった...それが失敗につながった」と、今となっては後悔して止まない。独立直後には「金メダリストのLさん」と呼ばれることも多く、その知名度から周囲に人が集まるようになり、仕事は直ぐに軌道に乗っていた。全ては順調であるかのように思われたが、興業後1年も経たないうちに、重要な事業に失敗し、多大な責務を負うことになってしまった。「今まで寄ってきた人たちが皆私のもとから離れていった」「今までの仕事は...私自身が仕事に努力した成果ではなく...単なる金メダルの副産物に過ぎなかったのではないか...?」と疑心暗鬼にも陥った。間もなく、離婚。2人の娘も引き取られていった。

孤独に苛まれ、社会復帰を目指しながら悶々とした生活を送る中で、ある日ふと思いついたのが「競技への現役復帰」であった。40代半ばにして「競技しか残っていなかった...」ことは、本人が立ち直るための

一助となっていた。「原点に戻りたかった」という強い意志から取り組み始めた二度目の競技生活は、20年間もの長いブランク、老いを少しずつ埋めていく作業であり、第一線での試合に耐えうる肉体を取り戻すには過酷を極めた。まさに「死の挑戦」と呼ぶに相応しいほど壮絶であった。早朝、新聞配達でジョギングをこなし、午前中は倒産した会社の借金を返済するため駆けずり回り、午後は母校で学生を相手に遅くまで練習に取り組む、そんな日々が1年間続いたという。このことは、当時のマスコミや世間を大いに騒がせた。「やり遂げなくちゃ...生きていく意味がない。なんとしてでも貫き通そう」と、そこで掲げた目標も、やはり「オリンピック出場」であった。代表選考に出場するや快進撃につぐ快進撃で、あと1勝で代表権が得られるところまで、なんとか漕ぎ着けた。結局は、もう一步のところまで出場権を逃してしまったものの、周囲からこの偉業に対する賞賛の声が高まっていった。そうした世間の声に耳を傾け、Lは「もう一度社会人としてやり直せる...」という自信を取り戻していった。

現在は、「一社会人としての信頼をなんとか回復したい」「自分にだって何か人の役に立つことができるはずだ...」という意思が強く、複数の会社の手伝いをしながら生計を立てている。また、「40代半ばでの競技復帰という偉業を果たした元金メダリスト」として、多くの講演依頼を受け、全国各地に出向くことも多い。「やはり金メダルの効果が絶大でしてね」というように、仕事の契約時にはどんなに遠くとも現地に赴き、金メダルを持参し先方の接待をするという。「事業に失敗したときは、金メダリストであることが邪魔で仕方なかった。でも、今では大いに利用していますよ。これも私ですからね」と、その職務内容にも今では充分満足しているようである。「死ぬまで挑戦ですね...でも、挑戦

は勝たなくちゃ意味がない...」との意志は固い。今は、「もう一度、社会で活躍したい...(金メダリストという)看板を背負ってるからね...」からの出直しですよ...」と社会復帰へ向けて意気込んでいる。

2 討 議

Lの場合、競技に取り組み始めた当初から「オリンピック金メダル獲得」という目標を定めており、その後のプロセスはまさに「アスリートとしての自分」を強化していくプロセスであったといえる。そして、実際に、金メダルを獲得し、その目標を実現化している。その後、尊敬する先輩から「仕事でも金メダルを」というアドバイスに影響を受け、競技引退を迎えた。「金メダル獲得」の目標が達成された直後に競技引退を迎えたLは、その後、大手企業に就職しており、そこでは、競技引退を通じて【アスリート→企業人】という移行を果たしていた。過酷な練習に取り組む毎日から、昼夜の別なく仕事に没頭する生活へと移ることは、比較的円滑に果たされていた。

また、これを契機に、Lは企業人としての「新たな自分づくり」に着手したわけだが、その際、アイデンティティ再体制化の手がかりとなったのは「尊敬する先輩」であった。彼もまた同じ金メダリストという経歴を持ち、企業人としての成功を納めていた。彼と自分との影を重ね合わせることで、企業人としてのアイデンティティを強めていったようである。つまり、そこでのアイデンティティ再体制化は「アスリート→尊敬する先輩と同じ自分」という組み換えが行われていたといえよう(図6-2)。その後、この尊敬する先輩が突然死去したときには、彼は「俺は一体、この先どうすればいいんだ」と、自己の存在意義に疑問を感じている。このことから、彼の志向性や行動の方向性は、この「尊敬する先輩」を拠りどころとしていたことがうかがわれる。

その後、事業に失敗したことを契機として、新たな自分づくりに再び着手することになる。「原点に戻りたかった…」としているように、Lは社会復帰をかけて「アスリートとしての現役復帰」を果たしていく。この時、彼は、競技引退の時期に果たされるべきであった課題に、20年以上経って再び向き合うことになったとみなすことができる。つまり、「アスリートとしての自分」でなく、また、「尊敬する先輩と同じ自分」でもなく、「より自分らしい自分」を求めたそこでの取り組みは、想像を絶するほどの過酷を極め、Lの「やりとげなければ意味がない」という強い意志によって支えられていた。競技に現役復帰して自分の「原点に戻る」といった取り組みが、その後の新たな自分を見出していこうとする自信となり、Lは社会復帰への取り組みを開始した。現在は、「元金メダリストの自分」であることを受け入れ、職務に対して懸命に取り組んでおり、Lが新たな自分づくりの最中にあることがうかがわれる。

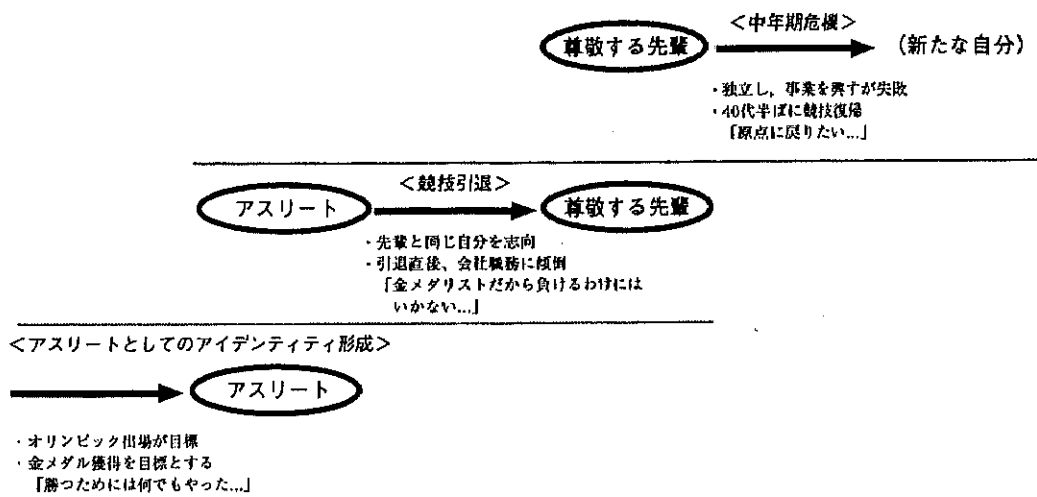


図 6-2：事例 L のアイデンティティ再体制化とその内容

第3節 中年期に再就職を余儀なくされた元オリンピック選手

中年期に長年勤めてきた会社のリストラに巻き込まれ、再就職を余儀なくされる企業人は、今日の混沌とした社会生活の中では、さほど珍しいことではなくなっている（金子, 1996）。「人生半ばの危機」と呼ばれるこの課題に対して、個人はそれまでの人生の中で培ってきた諸能力を生かして立ち向かっていかねばならない。元オリンピック選手であった彼も決して例外ではない。中年期危機に遭遇したとき、競技生活を含めたこれまでの人生の中で獲得した能力を生かそうとした彼は、競技引退に伴う新しい自分づくりで積み残してしまった内的な課題に改めて直面することになった。彼は、競技に対してどのように取り組み、競技引退をどのように体験し、そういった体験をその後の歩みにどう生かしていったのだろうか。

1 事例提示

事例の概略：調査対象者M（以下、「M」と称する）は、日本記録保持者であり、その記録は引退後30年以上経過した今も破られてはいない。国内では常に敵なしと評され、オリンピック出場を果たすが、本番では思わぬ惨敗を喫した。大学卒業後、大手企業に就職し、3年間現役選手を続けた。職務に就きながらの選手生活には指導者もなく、とかく怠惰になりがちな自己を奮い立たせようとする孤独な闘いであったという。競技引退後、30年間勤続。50代に差し掛かり、社内にてトラブルを起こし、リストラの対象となってしまう。再就職を余儀なくされ、新しい会社への転職を果たしたものの、職場での充実感に乏しく、やり甲斐を感じず、虚脱を感じていた（図6-3）。

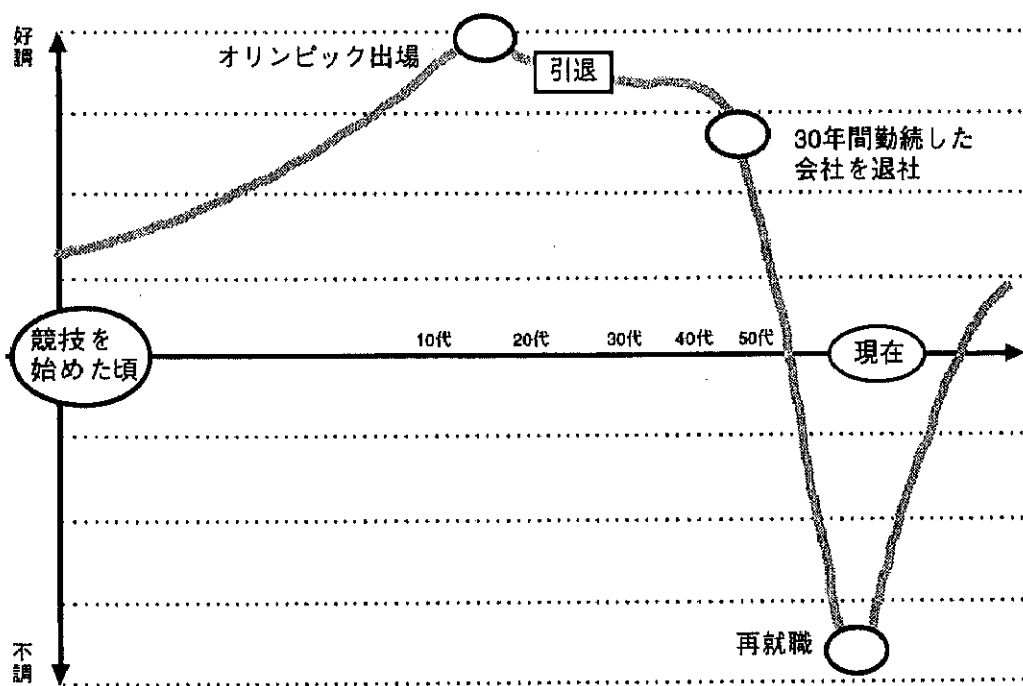


図 6-3：事例 M のライフライン

競技期：Mは、厳格な父親と従順な母親という家長絶対の家族構成の中で育てられた。姉、M、弟の3人姉弟の中で育ったMは、長男であったこともあり、両親からの無類の寵愛を受けたという。厳格な父は、地方の政治家としての役職にあり、いわゆる「地方の名士」としてその名を馳せており、Mは「息子の動向として常に周囲の目に晒されているような…」感じを幼心に持っていたという。

小学校高学年では陸上競技に取り組み、全国大会に出場した経験を持つ。この時、全国5位に入賞し、陸上関係者の目に止まることもしばしばあった。中学進学後の3年間、全国大会への出場は常連であり、その恵まれた才能に陸上選手としての将来が囑望されていたようである。「陸上競技をずっと続けようとは思っていなかったが…大会毎に入賞を果たしていたので…」と、陸上競技への傾倒はさほど大きくはなかったと振り返る。

高校進学と同時に競技を転向した。これには、父親に「お前はこれをやれ…」と強引にすすめられ、嫌々ながら転向せざるを得なかったという体験が含まれている。その頃の父親の印象は「とにかく怖い存在でしたね…やれと言われたら、とにかくやるしかなかった…」というように、Mにとって存在の大きさは絶大であった。

やむなく転向し、取り組みはじめてみて「当時は競技人口も少なく、オリンピックに行くにはこれしかないと思った」ことから、徐々に競技にのめり込んでいく。陸上競技からの才能ある選手の転向とあって、Mをみる周囲の関係者の目も期待に満ちていた。Mの競技成績も大会を重ねる毎に向上し、「高校入学前までは、陸上でインターハイに行くつもりだった…競技はかわっても全国大会に行きたいのには変わりがない…」という思いから「オリンピックにいけるかも」といった気持ちへ

と移り変わっていく。協会の支援体制も強力であり、Mを大器とみなすや否や毎週末、専任コーチを送り込み、指導を徹底する程の入れ込みようであった。その甲斐もあって、短時間にMの実力もメキメキ伸びていった。しかし、当時は、「練習メニューは与えられるモノであって、自分で考えてやろうなんて微塵も考えなかった」と、コーチから与えられる練習メニューをこなすことに徹しており、自身で工夫して練習に取り組んだことなどなかった。

ある雪の降る日、毎日の苦しい練習に嫌気が差し、練習シューズをわざと忘れて練習場に向かった。「受験勉強にも取りかかりたかったし、軽い気持ちでやった」ことが、当時のコーチの逆鱗に触れた。練習ができないことを申し出たとき、当時のコーチは「もう辞めてしまえ！」と怒鳴り、散々説教を述べたあと、Mに雪の深々と積もったグラウンドを裸足で何十周も走らされたという。Mは「とんでもないことをしてしまった」と反省し、それからは競技以外のことについて考えることを意図して排除するように努めた。そして、競技への傾倒は益々強まっていったようである。

大学進学も競技環境を優先して進路先を決定した。「他の大学からの誘いもあったが、当時のコーチの出身校であったことが選択の大きな理由だった...」とし、大学進学を果たした。これと期を同じくして、念願のオリンピック出場の権利を獲得する。「(オリンピック出場を)目標にしていたから、とても嬉しかった...でも、それで浮かれてしまったところも正直ありました」と当時を振り返っていた。

オリンピック出場決定からオリンピック本番までの取り組みは、「10本 10本という練習方法があって...10本全力で行ったあと、10本流して...また10本全力で...それが休む間もなく延々と続いた」「何度も気

を失いました」というように過酷を極めていた。そして、その甲斐あって、オリンピック本番の2週間前には、若干19歳の若さにして日本新記録を塗り替えるという離れ業をやったのけた。10代でオリンピックに出場することもさることながら、日本記録を塗り替えることは、当時のスポーツ界では偉業以外の何ものでもなかった。その上、競技に取り組み始めて4年目の快挙に、オリンピック本番でのMの活躍にマスコミや競技関係者など周囲の期待は否応なしに高まっていった。ちなみに、その日本記録は30年以上経った現在でも破られてはいない。しかし、周囲の期待とは裏腹に、オリンピック大会本番は敢えなく予選落ちに終わってしまった。Mは、緊張のあまり前日に風邪をひき、高熱が下がらぬままオリンピック本番に臨んでいた。「試合を終えるだけで精一杯...勝とう！なんて考えられなかった...出場するだけで精一杯」と目標としていたオリンピックでは思うような成績を納めることはできなかった。その頃の自分を振り返ると「最後の詰めが甘いというか...それを（現在も）何度も繰り返してしまっている」と反省の念に絶えない。しかし「オリンピックに出ることが目標」であったことから、その結果に当時は一応満足していたという。その後の大学4年間も、競技における華々しい活躍と共に過ぎていった。

大学生活も終盤に差し掛かり、いよいよ就職に取り組む時期を迎えたが、ここでもMは、競技環境を最優先した。しかし、自らが積極的に就職先を探したわけではなく、「就職はいわば裏口入学だったね」という。そもそも、その選定はMの父親に一任され、Mは競技継続に全力を費やしながらか、漠然と就職について考えるだけであった。こうした背景から父親の選定した企業に就職を果たした。そこでは、オリンピック出場経験者であることが重んじられ、若干の職務に就き、ある程度の所得を受

けつつ、競技生活を続けることができた。こうして、会社側の競技に対する理解を支えとして、「企業人」と「アスリート」という二足の草鞋を履きつつ、Mは3年間を過ごした。

実業団選手としてのMには、指導者はなく、毎日の練習も自身でスケジュールを決定し、会社に申請をして、勤務時間の一部を利用するといったものであった。オリンピック出場経験を重んじて、会社も全てをM自身に委ねていたようである。「今までコーチに全てを任せていましたから...自分は言われたことをやるだけでよかったんです...最初は何をどうすればよいのか全く分からなかった」と、はじめは戸惑いをみせていた。「直ぐに手を抜きたくなるもう1人の自分がいて...それを押さえ込んで厳しく自分を律することが難しかった...」と当時を振り返っていた。

引退期：2度目のオリンピック大会代表選考は、就職の問題が持ち上がる直前に行われた。「当然負けるはずがない...」「自分よりも強い奴なんているわけがない...」という思いから、「必ずオリンピックに行けるだろう」と周囲もM自身も信じて疑わなかった。しかし、まさかの惨敗を喫し、敢えなく2度目の出場権は逸してしまった。「こんなに頑張って(オリンピックに)出られないんだったら、もう(競技を)やっても仕方がない」と当時は大変落ち込んだ。「それまで就職のことなんて、考えたこともなかった」のが、この予想もしなかった大敗をきっかけにして「急に気になりはじめた...」という。しかし、直ぐに競技実践の場を離れようとは思わなかった。1週間ほど悩んで「就職なんて(父親に)任せておけば何とでもなる」「このまま(競技を)終わるのも癢にさわる。国内タイトルを制覇して...それから引退しよう...」と、再び競技目標の追求を中心とする生活を続けた。そして、より一層競技に傾倒していったようである。

ある時、職場の上司から「スポーツじゃ飯は喰えないぞ...」というアドバイスを受けた。まだまだ国内では充分トップクラスの競技力を有していたMではあったが、このアドバイスを契機に「これ以上続けるわけにはいかないか」と、自身の競技引退を具体的に考えるようになっていったという。それから2年後に、目標としていた国内タイトル制覇を達成した。その時には、「2度目のオリンピックもこれくらいの気迫があればなあ...」と反省が絶えなかった。そして、この目標達成を区切りとして、シーズン終了と同時に競技引退を迎えた。この時、「やっと終わった。嫌々やっていたところもある。何とかしてけじめをつけたいと思っていたから...良いけじめになった」と、少なからずの安堵を感じたという。この時期に、お見合いを通じて結婚に至り、その後、4人の子供をもうた。

再適応期：引退後の生活を具体的に見通すことなく、新たな生活が開始された。「とにかく与えられた仕事を一生懸命こなす」ことに没頭した。誰よりも早く職場に出勤し、誰よりも遅くまで残業に励むよう心がけた。

職務の傍らコーチ業にも励んだ。引退後の15年間は、日本代表級の後進を「(自分の)家族のことなど省みることもなかった」くらい熱心に指導した。「職場に迷惑をかけないことがコーチとしての信条」であり、実際、特別待遇で会社を休み、遠征試合に出かけたことはほとんどない。「私の思う通りの選手になることで強くなる...」Mはそう強調する。「コーチの言う通りに実行する...記録が伸びる...選手はコーチを信頼する...そういった信頼関係が大事...」「コーチがカリスマとなって選手の全部を管理すること...それが勝つ秘訣...」と訴えていた。

一方、時が経つに連れ、会社での働きぶりも目を見張るものがあった。

「フェアな会社だと思って、いけないと思うことには、（社内地位の上下の）区別なくハッキリ反論した」「競技での知名度が高かったから（仕事の）契約時にはそれも利用した」そういった形振り構わず仕事に励んだことにより、社内でのステイタスも急速に上昇していったようである。当時、「〇〇（社名）のM」と呼ばれることが誇りであり、周囲からもその仕事に対する敏腕ぶりには高い評価を受けた。しかし、その反面で「強引に片づけた仕事も多く、そのために社内には敵もいっぱい作ってしまった...」「気づいたときには、どうしようもないくらい（社内）で孤立していた」とし、この頃には「社内での人間関係の歯車が全くズレていた」という。「今から思うと...こういった人間関係がアダとなってしまった...後に迎える大きな問題につながっていたね」と、少なからず後悔していた。

50代半ばに会社の上司との些細なトラブルが発展し、30年間勤続した愛着ある会社を退社せねばならなくなった。リストラの対象となったのである。「会社にいられなくなってしまった」と再就職を余儀なくされた。

それを知った大学のOBから、「どこにも行くところがなければ、うち（の会社）にこないか」と誘われ、現在の職場に移ってきた。「職種が以前と違うから...宇宙人と話をしているみたいだ...」と、現状に対する不満は募るばかりで「この会社は自分に何も求めてはいないし、自分もこの会社に何も求めていない」「やる気が起こらない。今が人生最大のスランプ」としており、これといった打開策を講じずにいる。調査時点では、いわゆる「失業鬱」の状態にあった。競技への未練は残っていますか？との問いかけに、「いやいや...競技に燃えて...あの会社でもう一度燃えた...そんな人生を送るはずだったんだがね...」と応えていた。

2 討 議

Mは、高校時に種目を転向した当初から「オリンピック出場」を目標とし、「アスリートとしての自分」を確立していった。そして、この目標が達成され、益々、アスリートである自己が強化されていった。その後、重要な試合での敗北体験を契機として「国内タイトルを制覇する」ことを目標として掲げ、有終の美を飾るべく、アスリートとしての自分に没頭していったようである。また、この出来事と時期を同じくして、会社の上司から「スポーツじゃ飯は喰えない」というアドバイスを受けている。これらの出来事を通じて、Mは競技引退を決意し、その後、国内タイトルを制覇したことにより、競技実践の場を退いていった。

また、これに先行する職業決定において、Mはその選定を競技環境を最優先する意図から父親に依存していた。そこでは、自己の適性や将来性を見越したとは言い難い。そして、競技引退を迎えるや否や会社の業務に傾倒していったのである。このように、Mは、競技引退を通じて【アスリート→企業人】という移行を行い、その中では【アスリート→〇〇会社の自分】というアイデンティティ再体制化を行っていた（図6-4）。

その後、ふとしたトラブルから30年間も勤続した会社のリストラの対象となる。再就職を余儀なくされ、現在の職場には不満も少なくない。意欲に欠け、現状を打破できずにいた。

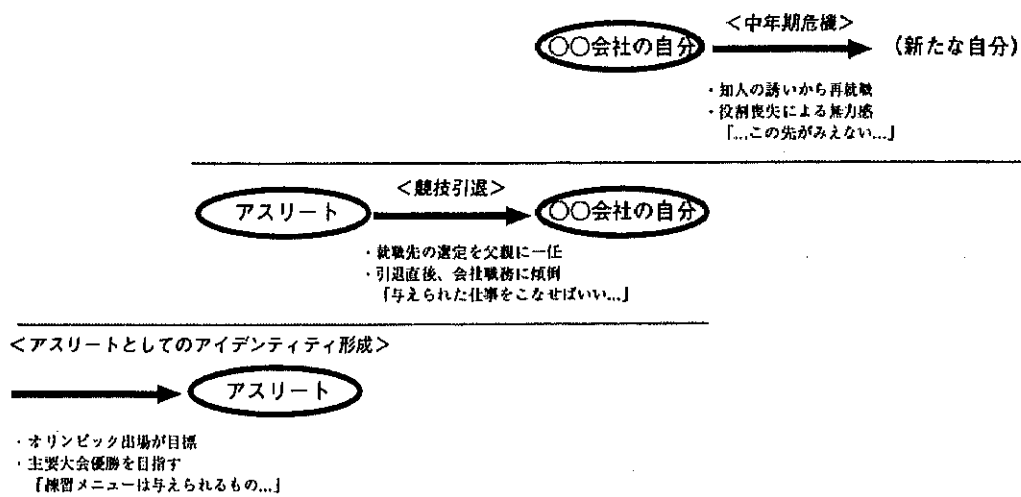


図 6-4：事例Mのアイデンティティ再体制化とその内容

第4節 総合的考察

ここで挙げた2つの事例は、様々な観点から理解することが可能であるが、ここでは、1 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセス、2 社会化予期と時間的展望、3 競技引退体験が中年期危機に与えた影響、という3点に絞って論ずることにしたい。

1 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセス

本章で紹介した両事例は、競技引退後の社会生活への移行は極めてスムーズであったと判断できる。そして、彼らが競技引退に伴って生じたアイデンティティ再体制化については、表6-1に示すような共通のプロセスを見出すことができる。すなわち、①引退の契機となる出来事を体験する危機期（敗北体験や他者からのアドバイスへの傾聴等の心理社会的変化）、②アスリートである自分の再吟味と引退へ向けての模索期（アスリートであることの有限さの認知と引退への方向づけと準備）、③競技からの移行期（競技実践から職務への傾倒対象の移行）、④アイデンティティ再確立期（社会的地位の確立・安定と充実感の拡大）、という過程である。

両事例の場合、競技引退を決意し、これを果たしていくプロセスの中で、アスリートである自分の歩みを再吟味した上で、再び競技への傾倒を強化していくという特徴が認められた。つまり、両者には、アスリートとしての「引き際」や「幕引き」への拘りが認められる。Lは、金メダル獲得という目標を、一方、Mは国内タイトル制覇を、それぞれ達成することによって、アスリートとしての自分に幕を閉じている。しかし、この時期に引退後を展望することはなかった。従って、引退後の生活を見通すことのないまま、競技からの移行を果たしていったといえる。当

表 6-1：競技引退に伴うアイデンティティ再体制化の過程

段階	名 称	事例内容との対応
①	引退の契機となる出来事を体験する危機期	敗北体験 や 他者からのアドバイスへの傾聴等の心理社会的変化
②	アスリートである自分の再吟味と引退へ向けての模索期	アスリートであることの有限さの認知と引退への方向づけと準備
③	競技からの移行期	競技実践から職場への傾倒対象の移行
④	アイデンティティ再確立期	社会的地位の確立及び安定 と 充実感の拡大

時、Lは「ただただ、仕事を頑張れば良かった。人生の見通しなんて何一つなかった」、Mは「とにかく与えられた仕事を一生懸命こなす」といったように、職場でのステイタスを確保するために、多忙に身を投じていた。つまり、両者は、自己の適性や「自分らしさ」といったことを配慮した上でのアイデンティティ再確立ではなかったのではないだろうか。このように両者は、競技引退を通じて、極めてスムーズな移行を体験したと判断できる一方で、十分な課題解決がなされていないことが危惧された。

2 社会化予期と時間的展望について

両者にとって【アスリート→企業人】という移行体験はスムーズに果たされていた。しかし、その裏では、先述の通り、競技引退に伴う課題が充分解決されていなかった、と捉えることができる。

Lの場合、尊敬する先輩の「仕事でも金メダルを」といったアドバイスを、一方、Mの場合であれば、上司の「スポーツでは飯は喰えない」というアドバイスと敗北体験を、それぞれきっかけとして競技引退を決意するに至っている。これらのことから、「もうこれ以上、競技を継続することはできない」という社会化予期によって、引退への方向づけと準備が促されたと考えられる。競技引退に関連した適応問題に焦点を当てている研究の中では、自らが引退することを予期できのたか、もしくは予期できなかったのかは、その後の適応に大きく影響するという指摘もみられる(Arviko, 1976)。ここでも、社会化予期はアスリートから次の生活への移行を促すことに貢献しているということができよう。

また、競技期において両者は、それぞれ「オリンピック出場」を競技における目標に設定しており、それへ向けての見通しを立てつつ、競技

生活に取り組んでいた。しかしながら、競技引退を迎える以前に、その後の人生を展望する機会をもっていない。実際、両者が競技引退を通じて体験した時間的展望は、L：「ただただ仕事を頑張ればいい...」、M：「とにかく与えられた仕事を一生懸命にこなす...」というように、仕事への傾倒が認められるものの、それには見通しが伴われてはいない。

なぜならば、Lは、職場への移行に際して、尊敬していた先輩と自分の姿を重ねていた。つまり、そこで行われた職業選択の裏では、いわば、「尊敬していた先輩と同じ自分」を達成したに過ぎなかったのではないだろうか。従って、それまでの自己の歩みを吟味し、自らの将来性を考慮した上での移行ではなかったであろう。ここでの問題性は、後に先輩の死去によって直面することになる。

また、Mは競技引退を迎える前から既に職務に就いていた。しかし、そこでの将来を見通したわけではなかった。加えて、それに遡る職業選択においても父親に一任し、決定を下しており、自らの適性や方向性を考慮した上でのこととは言い難い。

つまり、両者は、競技引退に際して、自己のそれまでの歩みを吟味するものの、それが競技領域にとどまっていたといえるのではないだろうか。そこでは、競技引退までの自分を見通すのみで、その後の社会生活については充分考慮されてはいなかったようである。このようにして両者は、職務に傾倒していったことが認められる。

これらのことから、両者は、競技引退を通じて直面すべきアイデンティティ再体制化において、アスリートではない自分について再吟味し、充分な見通しを持ちつつ対処したわけではなく、移行後の状況に傾倒していったといえる。そこには、いわば「スムーズに移行を果たしたものの、充分な内的課題解決がなされていない」状況が認められ、両者の場

合、十分な時間的展望を伴った移行とは言い難く、そこで解決すべき発達の課題が積み残されてしまっていたのではないかと危惧された。

3 競技引退体験が中年期危機に与えた影響

両者は、調査時点において深刻な中年期危機を体験中もしくは体験していたものと考えられる。

Lは、事業の失敗から多大な責務を負い、社会復帰を切望するという状況下で、競技に現役復帰した。このことが自信となり、「一社会人としての信頼をなんとか回復したい」「自分にだって何か人の役に立つことが出来るはずだ」と、社会への関わりを益々積極的に持つようになっていった。

Lの場合、自分が納得することのできる新たな「生き方」を模索する中年期危機の状態にあると考えられた。競技引退から社会生活への移行は極めて適応的であり、企業人としての成功も納めていた。しかしながら、重要な意思決定場面において、「尊敬する先輩」に依存していたことが認められる。実際、この「尊敬する先輩」の死去による「アイデンティティの揺らぎ」を体験しており、その迷いの最中に独立し、事業を興している。しかし、これが失敗に終わり、深刻な危機に遭遇することになった。「尊敬する先輩」とは異なる「生き方」を選択していくことが求められ、この重要な意志決定場面において本人が出した結論は「競技への復帰」であった。そこには、本人も指摘しているように「原点に戻る」という内的な作業が含まれていた。加えて、移行後の取り組みも、「金メダリストだから…」とアスリートであった従来の信念を補強するにとどまっており、青年期・成人期を通じて早期完了の状態にあったLが、ようやくモラトリアムの段階に入ったことがうかがわれよう（図

6-2) .

一方、Mは再就職を余儀なくされ、新しい職場に転職を果たしているものの、「この会社が自分の求めているものは何もないし、自分もこの会社に求めていることは何もない」「やる気が起こらない、今が人生最大のスランプ」としていた。

Mにも、Lと同様、発達段階の比較的早期から、主体的な意思決定の体験のなさが認められる。高校入学と同時に種目転向をしたのは、厳格な父の勧めであったこと、練習メニューはコーチから与えられるモノと捉えており、創意工夫をして練習に臨んだことがなかったこと、父親の選定によって就職を果たしていること、指導者の思い通りの選手を育てようとするコーチングスタイルを重視していることなどが、その裏づけとなろう。それぞれの場面では、多大なる傾倒が認められるが、重要な意思決定場面に主体性が認められない。これが、再就職後の職場での対処様式に反映されているのではないだろうか。加えて、「フェアな会社だと思って…」と移行後の取り組みもアスリートであった従来の信念を補強するにとどまっている。これらのことより、Mは中年期に至るまでの内面は早期完了の状態にあり、中年期危機に直面して、拡散状態にあることがうかがわれる（図6-4）。

以上の結果から、競技引退を通じて体験されてきたアイデンティティ再体制化は、中年期危機に直面して、再び問い直されていたことが認められる。青年・成人期を通じて早期完了の状態にあった両者は、競技引退に際して、自己のあり方を主体的に選び取っていく姿勢を獲得してはおらず、その後（中年期）の新たな危機場面に直面した際に、深刻な問題へと発展してしまったといえるのではないだろうか。

第5節 本章のまとめ

本研究は、競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関連して、元アスリートがどのようなプロセスを辿ったのかを明らかにし、その中で、社会化予期と時間的展望がどのような役割を果たしているのかを明らかにした。そして、そこでの体験が、その後の人生における危機場面に対して、どのような影響を与えるのかを検討した。

中年期危機を体験した元オリンピック選手から、以下のような結果が得られた。

1) 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化は、①引退の契機となる出来事を体験する危機期、②アスリートである自分の再吟味と引退へ向けての模索期、③競技からの移行期、④アイデンティティ再確立期、というプロセスを辿っていた。両事例の場合、競技生活から新たな社会生活への移行は適応的であったが、それに伴って内的な課題が十分に解決されてはいなかった。

2) 社会化予期は、競技から新たな社会生活への移行を助長し、一方、時間的展望は、アイデンティティ再体制化における課題解決の程度を決定づけるといえる。

3) 競技引退を通じて体験されてきたアイデンティティ再体制化によって積み残された課題は、中年期危機に直面して、再び問い直されることもある。

これらの結果から、競技引退を通じて体験されるアイデンティティ再体制化の中では、これ以上競技継続できないことに予め気づき（社会化予期）、見通しを持って（時間的展望）、自己のあり方を主体的に選び取っていくことが望ましいのではないかと推測された。なぜならば、そ

れは、来るべき新たな発達の危機に対して、有効な対処資源となると考えられるからである。